

入試講評・出題意図等

出題者からのメッセージです。きっとあなたの強い味方になります。

本学の入学試験問題は、高校の教科書を基本に、大学で必要な思考力や文章読解力を確認することを目的としています。各科目のねらいや意図を理解して、受験勉強に役立ててください。

英語

● 2026年度入試 出題の基本方針

◀出題の傾向▶

英語の問題は、(I)～(V)の5問構成となっています。出題形式は、(I)穴埋め問題、(II)並び替え問題、(III)比較的短い英文の読解問題、さらに長文読解問題((IV)と(V))となっており、これを60分で解答することになります。全体として問題数を多くせず、解答に時間の余裕が持てるように配慮してありますので、試験の際には落ち着いてじっくりと問題に取り組んでください。

◀出題のねらい・意図▶

(I)は語彙やイディオム、各種構文などについての基本的な知識を確認するための問題です。(II)は語法や文法に関する問題で、英文構成力を試す問題です。(III)は短めの英文や英会話(ダイアログ)を読んで、そこに含まれる情報を正確に把握できるかを問う問題です。読みとりが求められる情報は、ネットストレージサービスの広告文のような実用的な内容、あるいは何らかの話題についての会話のやりとりなど多種多様です。こうしたさまざまな場面に対応できる実践的な英語力を測ることがこの問題の意図です。(IV)(V)の長文読解問題はいろいろなトピックやテーマの英文を素材に、さまざまな問題を出すことによって、受験生の総合的な英語力を測ることを目的としています。特に議論の展開を正確に理解する力をみるために、段落の内容や文章全体の主旨を問う設問は必ず出ます。細かな部分まで読み込み、注意深く正解を選び出す力が求められます。また、文の構造を正確に理解したり、代名詞が指すものを読みとったり、といった総合的な文法力を問う問題、あるいは文脈のなかで語句の意味を推測する力を問う問題もよく出されます。

● 傾向と対策

◀全般的な対策▶

本学の英語の問題は、基本的なことを確実に身につけていれば十分に対応が可能な内容になっています。高校の教科書の予習・復習をするなかで、あるいは定期試験を準備するなかで基礎力を養ってください。その際、重要な表現や文法事項は、例文を利用して覚えることをお勧めします。その上で英語力をより確かなものにするために、定評のある英文読解と英文法の問題集をそれぞれ1冊でいいですから徹底的に反復練習してください。そうすれば本学のどんな英語の問題にも対応できるでしょう。ただ(III)の、より実践的な内容の英文理解力を確認する問題については、上記のようなさまざまな場面の多様な英文にあらかじめ慣れておく必要があります。また、長文読解問題への対応としては、話の全体的な流れを理解し、たとえ意味のわからない単語が出てきても文脈から推測できる力を身につけてほしいと思います。日本語でもかまわないので、多様な話題・情報に普段から接しておくこと、背景知識が蓄えられ英文も理解しやすくなります。

◀過去問の活用▶

上記のような本学の試験問題の特徴を知るためにも、自分の志望学科以外の問題も含めて、過去問は必ず解くようにしてください。過去問は単に傾向を知るだけでなく、解答のペース配分を考えたり余裕を持って試験に臨むためにも役立ちます。ぜひ活用してください。なお、入試問題をより良いものとするため、本学では問題形式についてはつねに検証と見直しを行っています。過去問から大きく変わることはありませんが、新しい形式の問題が出る可能性もあります。日頃の英語学習のなかで、ぜひさまざまなタイプの設問に取り組んでおくよう心がけてください。

国語

● 2026年度入試 出題の基本方針

大学の授業では、専門書や論文を読んでその内容を正確に理解し、またわかりやすく論理的な文章でレポートを書くことが求められます。本学の国語では、受験生がそうした基礎的な日本語の読み書き能力を持つかどうかを判定する問題を出します。大問三問のうち、(I)(現代文)は共通問題、(II)(現代文)と(III)(古典)は選択問題ですので、一題を選択して解いて下さい。(II)(III)両方を解いた場合、高得点の方を判定に用います。

◀出題意図等▶

(I)は論説文で、漢字の設問を含みます。設問は文章の論理を正確に読む力を把握することをねらいとしています。語彙や慣用語に関する知識、筆者の主張やその主張に対する理由や例等の文のつながり、文や段落同士の接続関係、概念やキーワード、全体の主旨や論理構成を問う設問が出されます。文中の語句の有無で正誤を判定するような表面的な読解ではなく、文章の本質的な部分を理解することが求められます。

(II)ではやや自由な書き方の論説や随想、時には小説やエッセイ、文学作品を引用したエッセイなどを出します。論理というものには論説文だけではなく、随想やフィクションの中にも存在するためです。こうした文学的な文章の読解では、筆者独自の視点など、文中に直接的に「書かれていない」ことを読みとる場面もありますが、文章の前後のつながりを踏まえ、「書かれている」ことから内容を読み取る読解の基本は変わりません。文章の論理を読み取る力をはかる点で、基本的な出題方針は(I)の場合と同様です。

(III)は古典です。物語や日記・随筆・説話、評論などの古文から出題します。古文特有の語彙、文法、文化に関する知識を踏まえ、文章の意味を正確に把握するための設問を設けています。全体の大まかな意味をなんとなく読みとるのではなく、基礎的な語句の意味や文法事項を踏まえ、文章の展開に即して、書かれている内容を正確に把握する必要があります。どんな場面か、誰が登場しているか、発言は誰のものか、誰から誰に向けた敬意が示されているかなど、基本的な事柄を一つ一つ

理解することが重要です。文法に関する出題もありますが、文法を通して場面の状況や人物同士の関係及び心理、筆者の主張など、文章の意味を総合的に理解することを重視しています。古文を理解するために重要な文学史や伝統文化、和歌の修辞等に関する出題も行います。

● 傾向と対策

日々の授業の予習・復習が基本です。高校三年間の国語の授業で学ぶ「読み」の方法を理解し、教科書や入試問題で頻出する著者の論説文などを精密に読み解く力をつけましょう。辞書を引いて語彙を豊かにし、常用漢字を復習しておくことも大切です。また、エッセイや文学作品など、幅広いジャンルや分野の文章を読むことも必要です。古典については、重要な古文単語や文法事項を復習し、単語の意味や機能を正確に把握する力をつけて下さい。さらに、語釈等を付した「注釈書」や「対訳」(古文と現代語訳を併録したもの)で古典作品の全体を読んだり、古典に関する新書等を読んだりすることも有効です。

過去問題を解くといった入試対策に特化した勉強も有効ですが、幅広い読書が遠回りなようでいて実は最も有効な勉強方法です。先生や知人に紹介された本を入口にして幅広い本を読むこともよいですし、自分が面白いと思った分野や著者があれば、特定のものを集中的に読み進めることも有効です。こうした着実な読書の経験こそが、大学生生活における全ての学びを支えてくれるはずですよ。

政治・経済

● 2026年度入試 出題の基本方針

出題形式は大問3題、解答総数35個程度、全問マークシート方式で、出題領域は政治・経済・社会の各分野から幅広く出題しています。出題に関しては、教科書や用語集、資料集で学習する事項を中心に、基礎的な知識の正確な理解を問う内容を中心としています。大学ではより専門的な学びが待っています。入学後、そうした学びの環境へスムーズに入っていくために「これくらいは理解してほしい」という水準の知識を問うことが、出題の基本方針といえます。

計算問題やグラフを用いた問題が出題されることもあります。これも高校での学習の範囲内で解答できる水準を意識しています。初めて見るグラフが問題に出てきても、グラフが示す内容や意味を落ち着いて読み解くことを心がけてください。また、出題頻度はさほど多くないものの、時事問題に対する一定の備えも必要です。新聞やテレビ、ネットなどのニュースで話題となった政治・経済・社会に関する出来事を日常的にチェックし、理解を深めておきましょう。

◀出題意図▶

入学試験が大学進学後における学習の能力適性を評価するものである以上、単なる知識の羅列ではなく、政治・経済・社会の相互の関係性についての正確な理解を確認するという要素が盛り込まれている点には留意が必要です。大問を政治・経済・社会で分けるのではなく、各大問にそれらに関する事項が渾然一体となる形で問題を配置されているのも、そうした意図によるものです(このため、大問ごとに出題の意図を説明するのは難しい構造となっています)。

また、単純に単語を尋ねる問題もありますが、記述を読んでその成否を判断するという形式の出題が中心となっています。読解能力を間接的に評価・確認したいからです。十分な読解能力を身につけていなければ、問題や選択肢が難しく感じるかもしれません。

● 傾向と対策

①まんべんなく勉強すること

出題の基本方針でも述べましたが、政治・経済・社会の各分野から幅広い出題がなされています。したがって、受験生がすべき対策の第一は、偏りのない学習をすることです。「特別苦手な分野がない」という状態を目指すのが、受験対策の第一歩として最も現実的でしょう。また、政治・経済・社会の各分野は相互に密接に関連しています。そうした関連づけを意識しながら学習することも、対策としては有効と思われる。

②正確な知識を身につけること

論述問題と異なり、マークシート式問題は各選択肢の正誤を短時間で正確に見極めることが不可欠です。したがって、受験生がすべき対策の第二は、基礎的な用語・概念等の正確な知識を確実に身につけることです。政治・経済の場合、(少なくとも入試問題のレベルでは)数学のような応用問題をマークシート式で出題することが難しく、基礎的な用語や概念、歴史の出来事に関する知識を問う問題が中心となる傾向があります。言い換えれば、それらについての正確な知識を身につけることが、有効な対策になるといえるでしょう。

③問題練習

受験生がすべき対策の第三は、上記のことができていないかを確認するための問題練習を繰り返すことです。その分量などは個々の受験生によって異なると思いますが、本学や大学入学共通テスト、本学と偏差値が近い他大学の過去問などを解いて、正答率が常に8割以上になることを目指すのが1つの目安になるかと思えます。

● 2026年度入試 出題の基本方針

これまでと同様に、教科書で学習する事項をきちんと理解しておけば解答できる問題を出題するよう心がけています。ただし教科書によって記述の詳しさなどが異なる場合もありますので、必要に応じて用語集や参考書なども利用して理解を深めてください。もちろん、歴史の知識の正確さを問う問題もありますが、基本的には、数千年にわたる歴史の流れを地球的規模の広がりの中で把握する力を試すことが主眼です。

● 傾向と対策・出題意図

では、こういった方針が具体的に入試問題にどう反映されているのか、という「傾向と対策」について例をあげながらお話ししましょう。それがすなわち、2026年度入試の出題意図にあたります。

第一のポイントは、年号のもつ「タテ・ヨコ」感覚を鍛えましょう、という点です。歴史の推移を理解するためには、それぞれの国や地域における出来事の順序などをきちんと頭に入れておくことが必要ですが、それだけでなく、同じ時代に別の地域で起こった出来事も対照して知識を整理しておくことも大事です。グローバル化が進んだ現代、地域ごとの分断された知識ではなく、地球的規模での変化の理解がますます必要となっています。

第二のポイントは、文字以外の情報にも注意を払っておきましょう。教科書に掲載されている地図、図表、写真なども見落とさないでください。例えば、ある地名が地図上のどのあたりにあるのか、また人やものの移動についてどこからどこへの移動なのか、ヴィジュアルなイメージとして把握できていなければ正確な知識とは言えないでしょう。

第三のポイントは、特定のテーマや地域だけに偏ることなく世界史の全体をきちんと勉強しておくべきだということです。ヨーロッパ史だけでなくアジアをはじめとする他の地域の歴史も世界の歴史を理解するうえで重要です。また、政治上の出来事だけでなく、宗教、文化、科学、思想などの歴史についてももしっかり理解しておく必要があります。

以上の点を意識した世界史の学習は、入試対策としてだけでなく、大学での学び、そして社会人の基礎知識としても一生役に立つと確信していますから、ぜひ注意して勉強してみてください。

● 出題のねらい（意図）と基本方針

教科書に記述されている基本的な歴史的事実についての確に理解しているか、また、それらの事実を相互に関連づけ、歴史の大きな流れの中に位置づけることができているかを問う問題を中心に出題します。高校で使用されている「日本史探究」の教科書を広く参照した上で問題を作成し、必要以上に細かな知識がなくとも解答できるようにしています。教科書の内容をしっかりとおさえておけば、合格点が取れるような問題になっていると思ってください。ただし、問題は多くの教科書を参照して作成されますので、自分の使っている教科書には載っていないか、他の教科書に記されている事柄について出題されることもありますから、用語集・参考書などで補って勉強することも必要です。

● 出題の傾向と対策

① 史料等にも目配りした幅広い学習

解答はすべてマークシート方式です。教科書に基づいた学習をしていれば解答できる問題がほとんどですが、年代、人名、地名、事件名などの知識を単純に問う問題はやはりではありません。歴史上の出来事や制度の内容、背景、影響、意義、前後関係などをきちんと理解するようにして下さい。また、具体的な史料、地図や図表などを用いた設問もありませんので、史料集・資料集を参照して、教科書の記述と関連付けながら内容の理解を深めておくことが良いでしょう。過去問から傾向を把握して対策することも有効です。

② 大問の1つは近・現代史

問題は3つの大問で構成されますが、そのうち1つは近・現代史を中心とした問題を出題します。残りの2つは近代より前の時代を中心に出題します。近・現代史は、第二次世界大戦後も出題範囲ですので、そこまで合せて勉強しておいて下さい。

③ テーマ史中心の出題

あるテーマ（例えば、「日朝関係」「交通」「寺院建築」「琉球・沖縄」）などについて、いくつかの時期・時代にまたがる問題文を出すことがあります。このようなテーマ史の出題に正しく答えるためには、単なる用語の丸暗記ではなく、教科書の内容のしっかりとした理解が必要です。先にも触れましたが、歴史を理解するためには歴史の大きな流れをおさえることが重要ですから、教科書の内容を自分なりにいくつかのテーマに即して整理してみると良いでしょう。

④ 問題文をよく読む

問題が難しい、もしくは教科書には載っていない内容が出てきたと思ったときには、問題文をよく読み直してみましょう。一見すると難しく思える問題でも、本文の中に答えのヒントがあり、それによって解答が見つけられる場合もあります。また、文章を選択する問題では、明らかな誤りを含むものを選ぶ場合と、最も適切なものを選ぶ場合があります。試験の際には、どちらを選ぶのかを取り違えないよう、設問の指示をよく読みましょう。

● 2026年度入試 出題の基本方針

出題される科目は、「数学Ⅰ」「数学Ⅱ」「数学A」「数学B」「数学C」です。数学Ⅰは「数と式」「図形と計量」「二次関数」「データの分析」、数学Ⅱは「いろいろな式」「図形と方程式」「指数関数・対数関数」「三角関数」「微分・積分の考え」、数学Aは「図形の性質」「場合の数と確率」「数学と人間の活動」、数学Bは「数列」、数学Cは「ベクトル」から出題されます。

昨年度の出題形式は、大問4つ、大問は複数の小問からなっており、小問は、それぞれの小問が関連している場合も、それぞれが独立している場合もありました。今年度も同様の出題形式になると思われます。問題文は単純に数式を解くだけでなく、数式を立てるための説明文があり、説明文が意味するところを数式で表現し、そのうえで解く必要があります。複雑な問題は誘導にしたがって解答できるように設定されています。説明文を見てたじろぐのではなく、冷静に読み進んでください。当初予想したよりも難しくないのでほとんどです。

《出題意図》

出題形式・解答形式は大学入学共通テストに準拠しています。解答はマークシート方式で、計算結果の数値をマークするものと問題にあてられた選択肢から適切なものを選んでマークするものがあります。選択肢が問題文の次ページにある場合もあるので、落ち着いて問題文を読んでください。問題は純粋に数学的なものから、実社会での応用を想定した問題もあります。また、計算力が必要な問題と、数学的思考力・展開力が必要な問題がバランスよく配置されています。

● 傾向と対策

受験勉強にあたっては教科書の各出題分野をものごとく学習しておくことが望まれます。受験対策に特別な参考書や問題集などは必要ありません。大学入学共通テスト対策が武蔵大学の試験対策になります。ですから、教科書の練習問題、章末問題、発展問題をきちんと解いて理解し、さらに大学入学共通テストの過去問題集や対策問題集などを解いて試験問題に慣れていきましょう。毎年「場合の数と確率」や「データの分析」の分野から出題されることが多いので、この分野の対策もめりなくしておきましょう。

問題設定の説明が長文になることもあるので、単なる計算力ではなく、問題文の「読解力」があるかが、きわめて重要です。証明問題や複雑な問題は解法が誘導されているため、問題文をよく読み、論理的に考えることが求められています。こうした出題傾向に対応するためには、計算問題だけでなく、教科書の章末問題や発展問題、あるいは大学入学共通テストの過去問題や対策問題集にあるような長文の問題を解いておくことが必要となります。

試験当日は、上述の各分野からバランスよく出題されるため、得意な問題は必ず正答することが必要です。苦手分野でも基本的なことをきちんとおさえて理解し、大問に含まれる小問の多数に正答しましょう。最初の大問から順番通りに解くのではなく、自分の得意な分野の大問から解いていきましょう。大問において各小問は、易しいものから難しいものに、難易度があがるように構成されています。したがって、全部の小問がわからなくとも、少なくとも前半の小問には正答するように努めてください。

● 2026年度入試 出題の基本方針

数学基礎は、2月2日または2月4日の入試において国際教養学部経済経営学（EM）専攻を志望する方だけに必須の科目でした。

EM専攻の学びの柱であるPDPは、武蔵大学の学位とともに、ロンドン大学の学士号（Bachelors of Science in Economics and Management）の取得を目指すプログラムですが、PDP履修には一定の数学の素養が必要となります。

そこで、経済学を学ぶ上で必須の数学分野に絞って、各分野の基本的事項に関する理解度を確保することを意図した問題を出題する科目として「数学基礎」を設けました。

出題される科目は、「数学Ⅰ」「数学Ⅱ」「数学A」「数学B」です。数学Ⅰは「数と式」「二次関数」「データの分析」、数学Ⅱは「いろいろな式」「図形と方程式」「指数関数・対数関数」「微分・積分の考え」、数学Aは「場合の数と確率」「数学と人間の活動」、数学Bは「数列」「統計的な推測」から出題されます。

昨年度の出題形式は、大問6つ、大問は複数の小問からなっており、小問は、それぞれの小問が関連している場合も、それぞれが独立している場合もありました。問題文は簡潔で平易なものばかりです。単純に数式を解くだけの問題も多く、応用的な内容というよりは教科書に練習問題で出てくるような基礎的な問題が主体であると考えてください。

《出題意図》

出題形式・解答形式は大学入学共通テストに準拠しています。解答はマークシート方式で、計算結果の数値をマークするものと問題にあてられた選択肢から適切なものを選んでマークするものがあります。問題は純粋に数学的なものほとんどですが、一部実社会での応用を想定した問題があります。計算力を確認する問題や出題各分野に関する基礎知識を問う問題が中心です。

● 傾向と対策

受験勉強にあたっては教科書の各出題分野をものごとく学習しておくことが望まれます。受験対策に特別な参考書や問題集などは必要ありません。教科書の練習問題、章末問題、発展問題をきちんと解いて理解することが最優先です。教科書に出てくる問題をきちんと解くことができれば、数学基礎の対策としては十分です。苦手な分野、わからない分野を作らず、出題範囲の分野をきちんと網羅して学習してください。

※数学基礎は、2027年度入試では実施しません。2027年度入試の詳細は、入試ガイドや本学公式Webサイト等をご覧ください。

※2027年4月より、カリキュラム変更・新専攻開設及び専攻名変更を予定しています。詳細は大学案内や本学公式Webサイト等をご覧ください。